

家族によっては世代を超えて語り継がれる苦難と救いの歴史というものがあります。わたしのごとく、しかも以前に紹介した話でまことに恐れ入りますが、ご紹介します。

母の家族はおおよそ80年前の戦時下に、父(祖父)の仕事の関係で朝鮮の仁川にいたということでした。彼の地で祖父は結核に倒れて召されました。祖母と母の他兄弟姉妹あわせて7人の家族は、なんとか日々の食をつないで、敗戦を迎えました。地域の日本人の集落では引き上げの日程を打ち合わせて、その日待つことになりました。当日の朝、集落場所に行くこととしたところ、集落全体がもぬけの殻だった、祖母と幼い子どもたち、10歳ぐらいの長男を筆頭に2番目の母以下、乳飲み子を抱えた家族7名は引き揚げには足手まといになると思われたからなのか、取り残されたということでした。ところが地元(元)の朝鮮のひとたちが一家を釜山の港まで案内してくれたといつのです。

母曰く、父母ともキリスト教信仰をもって朝鮮のごどもたちも自宅に招くなどし、一緒に遊ばせていたといつのです。そういうキリスト教の博愛精神を實踐していたことから、地元(元)のひとたちとよい関係を築いていたので、取り残された家族は助けられたのではないかといつのです。そして帰国後も教会の牧師館・牧師の住居に老牧師の身の回りの世話をするといつことで、身を寄せるところのない母子だけの7人家族を受け入れて頂くことになった、祖母はガラス工場で掃除婦として家族7人を養い、その後も長い間、わたしの記憶では戦後直後から、わたしが14、5歳くら

いまで(30年程度)、居候させていただいたのです。教会の恩恵を家族全員と共に受けた母は、当時、思春期にさしかかり、教会に嫌気を感じて否定的だったわたしに向かつて、キリスト教は、よい宗教だということを伝えたかったのだなと思い返すのです。ただわたしはキリスト教に胡散臭さを覚えておりながら、こういう生死が懸かった話だけは心から感心して聞いたものです。それをずいぶん前に「信徒の友」の「神の呼ばれて」という特集で牧師たちがその召命の動機を書きつづる特集に寄稿したのでした。

ところがこの話には、後日談があるのです。その引き上げの家族のうち母の妹が、帰化した韓国人の男性、叔父と結婚したのです。その叔父は、相当に頑固者でしたが、叔母の不屈の信仰により後に教会では役員を務めるほど筋金入り(クリスチャン)となりました。その叔父が、わたしの先のお話したことを「信徒の友」の文章を読んで、ひどく怒ったといつのです。今はその理由も、理解できるようになりました。(大学の時に同級の友がひとり、神学校でやはり何人も韓国人の友ができて親しくするうちに、彼らをとおして次第に分かるように心が育まれてきましたので、叔父の怒りも今では少しは理解できるのです。)つまり韓国から引き揚げた母の家族の歴史を、一方的で傲慢な美談に仕上げてしまっているのです。しかも「母の家族のキリスト教信仰はかくもすばらしい」といふような余韻をもたせたオマケまでつけてしまったから、叔父の怒りは相당한ものだと思います。

そこで先の話(韓国(当時の朝鮮)の人たちの立場)に立って物語を読み直してみます。当時の歴史事情をみると、小さなこどもだった叔父は、政治も何も分からない、「東

アジアの平和のため」と豪語する日本によって、一方的に植民地に組み入れられ、名前も日本の名前、学校では日本語を強要されて、毎日、隣国日本の国旗を掲揚し東京の方向、つまり皇居に向かって拝礼することを当然のこととして日々を送っているのです。朝鮮の方々の地域では、すでに任んでいる人たちに対して、許可を得ることもなく大挙して、当然であるかのような顔をして日本人がやって来た、その中に母の家族もいたのです。キリスト教精神でもって、親しくお付き合いしていたことはとてもよいことだと思えます、ただし、関係が対等ならば喧嘩もできるが、大きな波風を立てることはできないので、小さな事はつばを飲むようにして、ニコニコと付き合うしかない、内心は鬱屈した思いを刻み続けている。面従腹背なのです。そのような日々を送ってきたあげくに、怒りをぶつけるでもなく、朝鮮のひとたちは、取り残された母子家族を見捨てずに、故国に帰る事ができるように助けてあげたのです。賞賛されるべきは、朝鮮の仁川の人たちではないでしょうか？

このように、母の家族が朝鮮から帰国した話をよくよく考えてみると救いの物語が二つあることに、あらためて気がつきました。はたして母の家族が、キリスト教精神によって朝鮮のひとたちに好意的だったことが、救いのただひとつの根拠だったのでしょうか？ もう一つは、取り残され路頭に迷う母子7人家族を助けた、朝鮮の人たちの良心にあふれる行為こそが救いの原点なのではないでしょうか？

キリスト教信仰にしたがってこのわたしの母の家族がとおってきた歴史を深読みすると、神は母の家族に、仁川の人たちと親しく付き合っただけの信仰を与えてくださった。しかし仁川の人たちには、それを素直に喜ぶことがで

きない過酷な、政治国家、民族間の関係におかれていた、身の回りに起る出来事は、痛み怒りを抑えることができないようなこと、人間の宿業とも言つべき痛ましいことはかりが日常茶飯事であった、それでも神は、取り残された日本人の母子家族に対して、国家、民族の間に芽生える怒りを超えて、7人の家族を見捨てることなく、救いの手を差し伸べる良心を呼び覚ましてくださった。

ひとつの家族の歴史をもつ一度視点を交える、それも神との関わりについて自分の理解の枠を拡げて、あらためて理解し直すと思ひもよらない和解のための物語となることを、受け止めることができ感謝せざるを得ません。

本旨においておなじことが、イスラエルの民族の救いの歴史について言いつるのです。

1 イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった。2 荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。3 イスラエルの人々は彼らに言った。「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方が良かったです。あときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」4 主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの

指示どおりにするかどうかを試す。(出エジプト記16章)

エジプトで奴隷であったイスラエルの民は、モーセに導かれる旅の途上で困窮したイスラエルに天からパンを降らせて救われたのですが、それをイエスは「わたしは天から降ってきたパンである」つまり「神のもとから降ってきた救い」であると言われるのです。ユダヤ人たちは、その苦難の歴史を乗り越えた救いの出来事は、モーセによるイスラエル民族に限られた救いの歴史ではなく、「世を生かす」のです。

ユダヤ人にとってのモーセによる救いの歴史、それはサマリアの女と彼女の村のひとたちと共に分かち合う歴史ではありませんでした。ユダヤ人とサマリア人の間にイエスが立っておられます。イエスのもとに集ってきた異なる民族の間に和解が必要だったのです。

ひとつの民族の救いの歴史、それを「世」を生かす、「世」の救いの歴史にまで拡げるとき、ひとは深い痛みを覚えるでしょう。それほど痛みを伴うならば和解など必要ではないと拒絶さえ厭われないかもしれません。それほどまでに、ひとりの救いの歴史が、神が集められた人たちと共にあずかる救いの歴史にまで拡げられるとき、痛みをともなうのでしょうか。

なぜならあまりにも辛い過去、あの苦難から解放された、自分だけ、家族だけ、今いる仲間だけが共有する喜びは、自分の歴史、自分ひとりにしか分からない状況で起こったからです。ひとつの家族に限られた救いの歴史も他者

には決して分らない小さな出来事が集められて、一つ一つが大切な宝石のようなものです。まったく事情が分らない他者、まして自分と敵対する他者とは決して共有することができない、もしもその封印を解くならば、すべてが意味を失うかもしれない、微塵に壊されるかもしれないという誓いをだれしも直感するものです。

ヨハネによる福音書のユダヤ人とサマリア人の間の確執には、それぞれ固有の救いの歴史と戒律があります。だから、ヨハネ福音書を共にする信仰者たちには、伝統(ユダヤ教)に特有の戒律は廃されて、「互いに愛し合う」ことだけが唯一の戒めとして与えられました。(13章)

さらに、その戒めを根拠づける原点には、救いが崩れ落ちるといふ恐れ、取り除くため、すなわち世を愛された神が、世を和解に導くために、最も憎悪、脅威に対して無力で小さな存在が必要だった。救いの物語を拡げて和解をもたらすためにだれしもが抱く恐れを小さな存在として一身に集中させる存在が必要だった。それがイエスによる救いの完成、十字架だったのです。

「:47はつきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。48わたしは命のパンである。49あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。50しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。51わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」